## 故・小川正英兄の前夜式に出席して

平口 哲夫

小川正英さんは、2021 年 6 月 19 日(土)に天に召され、6 月 21 日(月)に若草教会にて行なわれた前夜式に出席。山本正人牧師の説教「神の栄光にあずかる希望」では、正英さんのご生涯について詳しい紹介がなされました。私には初耳のことが多く、感銘を受けたので、その説教を本号に掲載することを提案したのですが、紙面に全文掲載する余裕がなく、掲載可能な範囲にまとめるのは、ご多忙の山本先生にご負担を掛けることにもなるので、平口が自由投稿として感想を述べることになり、ご生涯については許可を得て説教原稿の一部を参考にしました。

正英さんは、1932 年 8 月 29 日、旧河北郡宇ノ気村宇ノ気に小川正介(まさすけ)さん、直(なお)さんのもとに生まれ、石川県立農事試験場農芸試験地で育ちましたが、18 歳でお父様を、21 歳でお母様も亡くされるという苦難を経験なさいました。しかも、金沢大学に入学後、結核にかかられ、療養所で療養生活を送られました。

その療養生活において、正英さんの人生を大きく変える、二つの出会いがありました。その出会いは二つとも、北陸学院のミセス・ロエナ・ハドソン・ウィン宣教師を介してもたらされたものでした。一つは、ウィン宣教師が学院の生徒を連れて療養所を訪問されたことがきっかけで、正英さんは 1957 年 6 月 9 日、若草教会にて当時の若草教会牧師、加藤常昭先生から洗礼を受けました。もう一つの出会いは、ご伴侶となられる和子さんとの出会いでした。正英さんに英語の聖書を届けるよう、ウィン宣教師が和子さんに依頼したことがきっかけで、お二人は出会うことになったのです。その後しばらく、直接会う機会はないものの、文通による交際は続けられました。1960 年、正英さんは金沢大学法文学部文学科を卒業、番匠鐵雄先生が学院長をなさっていた北陸学院高等学校の教諭に就任、和子さんも番匠鐵雄先生に請われて北陸学院小学校の教諭になられ、1961 年 4 月 2 日にお二人はご結婚。加藤先生は、新しい任地への旅立ちを遅らせて、お二人の結婚式の司式をなさったそうです。

お二人はご長男の有美(ありよし)さん、ご二男の啓史(けいじ)さん、ご長女の「いづみ」さんという、3 人のお子さんを授かりました。山本先生が有美さんと啓史さんにお父様のことについてお尋ねしたところ、毎年白山に登山、運動が得意ではないのに啓史さんとはテニスをしてくれた、アメリカ・ヨーロッパ旅行の体験話や油絵を描いていたことなどの思い出を話してくださったそうです。

正英さんは 1965 年より、石川県立金沢中央高校、二水高校、つるぎ高校、泉丘高校にて英語科の教諭として教壇に立たれ、1993 年に定年退職されてからも石川県のさまざまな機関で責任ある立場を務められました。1996 年に金沢大学大学院文学研究科修士課程に進み、1998 年に同課程を修了、文学の修士号を取得。1998 年～2003 年、金沢大学で非常勤講師。また、英文学の専門家、特に T.S.エリオットの研究家として、『エリオットへの序章』(英潮社新社英文学叢書, 1987)、『T.S.エリオットの座標軸』(日比谷出版社, 2020)という 2 冊の本を著されました。

私は正英さんよりも13歳若く、1953年、中学2年のときに若草教会に通うようになったので、正英さんと話を交わすようになったのは、仙台での学生・院生の生活を終えてから、つまり1974年以降のこと。それも、大学・研究関連のことなどを少し話し合う程度、ご生涯の大半については前夜式まで存じ上げないままでした。乳幼児の頃のご長男については憶えており、前夜式で正英さんに似た長身のお姿をお見かけし、感慨深いものがありました。最晩年、ご自宅での療養や施設での生活をなさってからは、お会いする機会がなくなりましたが、新刊のご著書は奥様を介していただきました。T.S.エリオットがミュージカル『キャッツ』の原作者であることぐらいしか念頭になかった私には、とても歯が立たない、丹精込めた力作でした。

(すなどりNo.230から転載)